

カーが市内全域に広がっていく。子供がサッカーを始めたことで、それを見ていた両親もサッカーをやるようになり、しだいにサッカーは「ファミリースポーツ」の様相を呈してくる。そして今では、幼児からお年寄りまで年齢・性別を問わず楽しめる「生涯スポーツ」となったのである。また、年を追うごとに清水サッカー協会をはじめ、指導者間、育成会の組織力、結びつきも強固なものになっていった。

清水市のサッカーの具体的な活動事例として、まず「清水カップ全国少年少女草サッカー大会」を取り上げた。全国から288チームが参加し、5日間にわたって行われる大規模な大会を、実際に運営するのは少年団育成会の父母である。会場は、市内の小・中学校のグラウンドを利用し、高校生が審判、中学生が記録を行うという、市民による手作りの大会である。市・サッカー協会・育成会が三者一体となって運営し、宿泊、交通、会場をこれだけの人数分確保できるのは、サッカーに理解のある土地、清水市ならではの。

第2の活動事例として、社会人（同好会）チームの一つ、「清水エランビタールFC」というチームの活動を挙げた。市教大というサークルの〇期生という繋がりをベースに、各々の友人を誘って結成されたチームである。初心者が多く、技術的には未熟な面もあるが、メンバーはとても仲が良く、本当にサッカーを楽しんでいる。また、「エランビタールに入っていなければ知り合えなかった仲間が大勢いる」という意見にみられるように、仕事以外の人間関係を重視していた。

学校や職場など、限られた空間以外での交流、人間関係の構築に核となるのが、清水では「サッカー活動」であるといえるだろう。今回の調査で、「サッカー」というスポーツが、清水市の人々にとって常に身近にある存在だということを強く感じた。清水市のサッカーの種を撒いた指導者達やサッカー協会が、サッカーを楽しむ風土、サッカーを身近

に感じられる環境を築いてきたからこそ、サッカーは清水市において、人々を結びつけ、地域社会を形成する核となる、いわば地域文化だといえるのである。

## “食の力” — 「佐野ら一めん」

五十嵐理真

日本ほど麺文化の発達した国も珍しい。その中でも最も地域性とバラエティに富んだ麺はラーメンであると言えよう。明治後期に中国から伝わり、百年もたたぬうちに瞬く間に日本の各地域に浸透した。そのパワーと速度は計り知れない。この偉大なラーメンの一つ、栃木県の「佐野ら一めん」に着目した。佐野ら一めんは、2メートルもの長い青竹で麺を打つ、平打ち縮れの青竹手打ち麺と、トンコツ、鶏、野菜をベースにしたアッサリ醤油味のスープを特徴とした本格派ラーメンである。

佐野ら一めんは、日本三大小麦の産地・日本名水百選出流原弁天池の湧き水・低湿度の冬と内陸性の暑い夏という地理的背景に加え、大正5年頃横浜中華街からやってきた中国人コックが伝えたら一めんが、当時織物産業が盛んだった佐野でそこで働く織工さんたちの夜食や出前として利用されたのを機に、次々とラーメン店が増えたという歴史的背景を持つ。市内には約230軒のラーメン屋がひしめき、市民は週に1回以上は必ずラーメンを食べる。特にお客さまが来た時、すしでなくラーメンをご馳走としてもてなしたり、家族揃って外食するのもラーメン、恋人たちのデートにもラーメン、というのが佐野流だ。昭和63年には「佐野ら一めん会」が結成され、佐野ら一めんのPR活動を全国に向けて積極的に行っており、ら一めん会発足で観光客は倍増。佐野は今や“ら一めんの町”として各地に知れるところとなった。東北自動車道や国道が走り、車の便が良いこともあって、休日には他の県からラーメンを食べにやってくる。

「青竹打ち」はとても重労働で、昔行っていた所も今や全てオートメーション化された中、佐野は昔ながらの伝統の手打ち法をかたくなに守っている。また、「佐野の水を使って、この地で作ったラーメンをこの地で食べる」のが佐野ら一めんであり、日本4大ラーメンの札幌や喜多方などのように、全国にチェーン化しないことも特徴と言えよう。一見、外に出ようとしなない頑固もののように感じられるが、裏を返せば頑固だからこそ昔ながらの青竹打ちが残っているのではなかろうか。さらに佐野ラーメンのスープ・具を見ても、いたってシンプルであるが、シンプルだからこそ誤魔化せられない。シンプルさの中に本物の味が光っているのである。

私が1997年8月に行った「岡崎麵」のもとでの2週間に及ぶラーメン修行体験では、青竹打ちや接客のみならず、もっと深いものを学んだ気がする。ラーメン職人の生活ぶりを見ながら、古き良きものを守る大切さと難しさ、人にとって生きる価値となるもの、家族の絆、夫婦のあるべき姿である。店主の岡崎さんは「他人より何倍も手間ヒマかける。そうすることで何かが生まれる」と、毎日とても多忙なスケジュールの中で、お客さまへ出すラーメンへの愛情とこだわりを貫いている。そうすることでお客さんに作り手の心が伝わり、ラーメンを通して人が繋がっている。また岡崎さん自身も自分の納得のゆく人生を送ってられるのだ。

まさに佐野ら一めんは、作り手・受け手双方の「ひとをつくり」、佐野という「まちを彩り」、人と地域、双方の「歴史を刻み」、そして近い将来、ラーメンを通して人と人との心の繋がりが、「世界を結ぶ」であろう。

“食の力”－“佐野ら一めん”に私は敬服するばかりである！

## 公園の利用状況にみる地域間の差異

上野悦子

我々が何気なく目にし、利用している公園

は、都市を形成する上で重要な役割を果たしてきた。本研究ではそこに着目し、公園、特に公園の利用状況を通して、大都市と地方の小都市との地域間に生じる差異を見いだすことを目的とした。

そこで、地方の小都市として栃木県真岡市を、大都市として東京都杉並区を選定し、真岡市では古聖公園、駒塚公園、泉公園の3カ所、杉並区では今川一丁目公園、今川二丁目公園、桃井公園の3カ所、合計6カ所を調査対象公園とした。調査方法は来園者を対象としたアンケート調査と、来園者の行動及び移動の軌跡を追跡調査する観察調査というものであった。

アンケート調査の結果から、真岡市ではより家に近い公園を頻繁に利用し、杉並区では遠くても子供があそぶ公園を週に2～3回利用するという利用の傾向の違い等が分かったが、差の原因まで踏み込めなかったのが残念である。

また、観察調査の結果から行動パターンに顕著な差異が生じることが分かったが、これは公園の構造や遊具の配置、さらに公園の周辺環境に規定されていた。真岡市では公園内に「広場」が設けられており、そのため遊具が一方に配置され、一方型という行動パターンになった。一方、杉並区では遊技場が設けられていたり、遊具がアスレチック的要素を持ったものが多いため、集中型という行動パターンになりやすく、球技のない公園では遊具の配置によって集中型や全体型となった。

これには真岡市と杉並区の土地区画整理事業が深く関係している。真岡市では比較的新しいもので、現在も進行中であるため、歩行者専用道路の整備や「広場」の設置等が行われている。しかし、杉並区では昭和10年にすでに竣工しており、これから同様な整備をすることは困難である。このような背景から、公園の構造や遊具の配置が全く違ったものとなっているため、行動パターンも違っているのである。